

●柱立てたよくな岸壁

お倉ヶ浜から伊勢ヶ浜を通って細島半島を回遊する海岸線は、日豊海岸国定公園にふさわしい景観である。日向岬の突端には福井県の「東尋坊」に勝るとも劣らない「馬ケ背」の岩場が広がる。

千五百万年も昔、地下のマグマに押されてせりあがった尾鈴山の岩体が、日向岬の海岸一帯まで噴出し、次第に冷える過程で、見事な柱状節理を形成した。波に洗われて浸食された表面はハチの巣状の模様となり、入り江の奥は削られて、柱をびっしり立てたよくな岸壁となった。

馬ケ背は海との接点から奥行き二百^{メートル}、幅十^{メートル}の切れ込みが生じ、両側の絶壁は約七十^{メートル}。打ち込む波のしぶきと潮風が、底の方から吹き上げて、海の雄たけびのように聞こえる。こうした切れ込みは細島灯台東側にも四カ所あり、その景観は「日向の東尋坊」の名に恥じない。



馬ケ背。絶壁を伝って海の雄たけびがせり上がってくる

ここから海岸道路を細島港の方に回り込む一帯が、御鉢ヶ浦である。その途中に「黒田家臣の墓」がある。

文久二（一八六二）年、薩摩の島津久光は、精兵一千を率いて上京し、幕府に働きかけて公武合体を進めようとした。京都周辺で活動していた尊皇攘夷論の過激派は、久光の上京を討幕の動きと誤認、この機会に武力行動を起こそうと伏見の寺田屋に集まった。このことを知った久光は、鎮めるために家臣八人を遣わしたが、過激派は服従せず、ついに惨殺されるという悲劇を生んだ。

この事件に関連した黒田藩（福岡）の藩士三人が、薩摩藩の船で運ばれる途中、細島で惨殺され、放置された。

遺体を発見したのは付近の住民・黒木庄八。細島役人の検視の結果、遺体は黒田家臣・海賀

宮門（くもん）、千葉郁太郎、中村主計であることが分かった。庄八は遺体の無残さを哀れみ、手厚く吊って墓を建てた。今に至るまでその子孫がこの墓を供養している。

激動の幕末史は、穏やかな細島湾に「影」を残した。細島は日向国第一の良港で、江戸時代は天領（幕府直轄領）の港町として栄えた。高鍋藩、佐土原藩などの参勤交代、あるいは瀬戸内、大阪方面との交易の港であった。

高鍋藩が、利用した高鍋屋旅館および付属棟は、日向市の指定史跡となっており、木造三階建ての建物は改修されて「細島みなと資料館」として利用されている。細島海岸巡りは、新しい散策スポットとなりつつある。

甲斐 勝